瀕死の日記

二〇一二年九月

春巻

九月一日（土）

もう九月なのにどこからか花火の火薬のにおい。
だが、それもまたあり。
私は再び歩き出した。

九月二日（日）

夢の中で、いくつかの物語が何年も続いている。
その中で、私は善良な人間を計三人惨殺している。
いずれも死体は見つかったが、犯人はばれていない。
ばれない確信が持てた途端、私は惨殺に取り憑かれた。
自分の中のどろどろが、暗い歓喜がとめどなく露わになった。

九月三日（月）

大安。
婚姻届を出しに行った。
うそ。
本当はドラえもんの誕生日。
おめでとう。

九月四日（火）

電池がなかったので、音楽を家に置いてきた。
毎日毎日音楽を聴いて歩いていたので、
なんだか今日は世界が欠けたような気がした。

九月五日（水）

帰り道、ランドセルを背負った子供とすれ違った。
頭を深く垂れ、随分としょげかえった様子だった。
振り返ってよく見ると、それは老人だった。

九月六日（木）

うっすらと汗を浮かべ、きりっと一文字に口を結んだ夏服の女の子。

生きるということ。

九月七日（金）

電車の中に、若い男が立っていた。
耳の穴奥深くに、パチンコ玉らしきものが入っていた。
訳が分からなかった。

九月八日（土）

とても小柄なピンクのワンピース姿の女の子が、
黒くてバカでかいヘッドフォンをして歩いていた。
気高い人だ、と私は思った。

九月九日（日）

漆掻き職人は孤独だ。
南から北へ独りで旅をし、独りで漆を採取し、仮の住まいで独り寝る。
昭和四十年頃撮影された、そんなドキュメンタリーを観た。
その職人は訛りがきつくて何を言っているのかさっぱり分からなかったが、
彼は正真正銘のハードボイルドだった。

九月十日（月）

私は採血が好きだ。
ちくっ、と針が動脈に刺さるのが好きだ。
血が、ちゅーっと容器の中に入っていくのが好きだ。
血の、絵の具のようなマットな赤の色が好きだ。
ただし、後日渡される採血の結果だけは好きではない。

九月十一日（火）

すごいでぶ男だ！
すごいでぶ男だ！
すごいでぶ男だ！
私は心の中でそう繰り返しながら、途中までこのすごいでぶ男の後をつけた。
その揺れる異形の肉は巨大な腐肉だ。

九月十二日（水）

胃カメラを飲んだ。
技術の進歩のおかげで、おえっ、は少しだけ。
モニターにはポリープひとつなかった。
最後に胃カメラを吐き出した時、私はなんだかとても損した気がした。
巨大な悪性ポリープを切り取るドラマチックな場面を期待していたのに。

九月十三日（木）

昔から、体の力を抜くことができない。
もっと力を抜いて、といつも怒られる。
そして私は申し訳なくなる。ふがいなくなる。
しかし、もし、自分がふにゃふにゃのひょろひょろだったなら、
きっと、生の心地よさのあまり、たいそう死に怯えていたことだろう。

九月十四日（金）

帰路、前から斜めたすき掛けの男が三連続！
楽なんだよな。
どうでもいいんだよな、もう何もかも。

九月十五日（土）

ふと入った神社に「安産祈願」とあったので、私は安産を祈願した。
妊娠もしていないというのに。

九月十六日（日）

夕刻、路上の易者が、こっくり、こっくりしていた。

おやすみ。

九月十七日（月）

バスに乗ったら、運転席の後ろの座席で、前の手すりに靴を脱いだ臭そうな両足をのせてふんぞりかえった、ひどく行儀の悪いおっさんが座っていた。私はその後ろの席が空いていたので、そこに座った。

私は後ろからおっさんの髪が薄くなったパーマ頭を見ながら、こいつの頭をマグナムでぶっ飛ばせたらすっげー気持ちがいいだろうなあ、と思った。

九月十八日（火）

夕刻、眠る茶とら猫の体に、細い柵の影がうつり、見事なトラになっていた。

九月十九日（水）

職場の近くに、飛び降り自殺に絶好の場所を見つけた。
私は浮き足だった。
飛び降り自殺は、自殺の中でも最も苦痛の少ない手段だ。
私に両親がいなかったら、私は身辺整理をした後に、笑顔で欄干を越える。
今日はそのことばかり夢想していた。

九月二十日（木）

自分がやりたいことを探している人は愚かだ。
醜い。
自分が他人にしてあげられることは何なのかを探している人は賢明だ。
手をさしのべて、拒絶され、あるいは運がよければ感謝され、
一筋縄ではいかない世の中を知る。

九月二十一日（金）

職場の仕事はくだらないが、気が紛れる。
これがなかったら、私は絶対に、とうの昔に命を絶っている。
本当に、世の中はくだらないもので溢れている。
しかし、我々はそのくだらないものによって生かされている。
くだらないものの空虚さの反対側に自分というものがあると信じているのだ。

九月二十二日（土）

ユーチューブでスピッツとかを観ていたら一日が終わってしまった。
ユーチューブは危険すぎる。

九月二十三日（日）

ポール牧は最後に指ぱっちんをして飛び降りたに違いない。
土日はすっかり死に浸る日になってしまった。
死のことを考えるだけで、私は心がとても楽になる。
「生・死」は「苦・楽」だと思う。

九月二十四日（月）

今週も早速飛び降り自殺ポイントに立つ。
最近のビルは窓も開かないし非常階段も吹き抜けになっていない。
もちろん屋上にも行けない。つまり、どこからも飛び降りられない。
その点、このビルは非常階段が外部にあり、高さもある。
まさに飛び降り放題。

九月二十五日（火）

今日は多田かおるさんの誕生日だ。
生きていれば五十二歳になられる。
逝去してもう十四年もたつのだ。
にもかかわらず、公式ホームページが今も当たり前のようにある。
私はそのことに驚き、目頭が熱くなった。

九月二十六日（水）

死にたいくらい落ち込んでいる時、浮上のきっかけになるのがトイレだ。
布団の中にくるまっていても、トイレの時だけは布団を出なくてはならない。
そして用を済ませたら、ついでに台所で甘いものをつまむ。
落ち込んでいる間は妄想で脳を酷使するのだ。
そうやって甘いものをつまんだら、なぜか外の空気が吸いたくなるのだ。

九月二十七日（木）

いいかげんピロリ菌の除染がきつい。
もう一週間ずっと下痢だ。
ふざけた名前のくせに、この野郎。

九月二十八日（金）

職場からちょっと歩くと、スカイツリーがよく見える。
あの塔の下に庶民的な下町が広がっていると思うと、
あの塔の下の人々がおらがスカイツリーを自慢げに思っていると思うと、
私はなんだかとても気持ちがよくなる。
六本木ヒルズなんかとは大違いだ。

九月二十九日（土）

明日、小島麻由美嬢が四十歳を迎える。
信じたくないが、本当のことだ。
撃て！　トランペッター。

九月三十日（日）

さようなら、何もなかった、私の九月！